

■ ‘ひと・まち・匠’

一昨年(2009年)、九州支部大会を大分で開催しました。
テーマは‘ひと・まち・匠’です。
地域に共生するまちづくりの中で建築の果す役割を様々な視点から提案致しました。
私達は豊かな地方都市大分づくりの為に‘ひと’と‘まち’と‘匠(建築)’のつながり・きずなをさらに深めていく事を、そのとき再確認致しました。

大分会会員



■ 先人達の暮らしの知恵



川に囲まれた大分市高田地区は輪中を形成し、洪水の常襲地帯でした。
住民たちは、屋敷を石垣で高くし家の周辺をクネ(防水林)で取り囲み洪水の勢いを弱め屋敷の流失を防いでいました。洪水後、肥えた土が積もり豊かな土壌で農業を営みまし
た。川と共存する文化を創り出していったのです。



別府では温泉蒸気を利用して食材を一気に蒸し上げる料理法として‘地獄蒸し’が江戸時代以前より伝わります。無駄なく温泉エネルギーを利用する先人達の知恵から生まれたものです。



日田の山間にあたる皿山地区の小鹿田焼の里です。
谷川の水流を利用した唐臼により陶土をつくり出しています。
国内でも珍しい水力利用の唐臼の音は日本の音百選に選ばれ、文化庁の重要な文化的景観に指定されています。

■ 2011. 3. 11東日本大震災以降

2012年の夏は節電が声高に叫ばれています。昨年も同様な猛暑でした。でも今年はどこかが違います。目に見えない放射能の影響があまりに大きく、自分達の生活スタイルと安全性を考えた結果、原子力発電所の是非が問われています。定期点検後の原発の再稼動が制限されてることや震災影響をうけている発電所等々で、電力会社の供給電力量が著しく制限されています。
その中で、私達も節電に協力している訳であります。少しでも電力消費を抑えたいという思いから、熱中症で治療を受ける人たちが大幅に増加しています。私達が望んだ「豊かさと便利な生活」。食料やエネルギーを多量に消費した「これまでの生活」。安全性という観点からは、いかに脆弱なものであり、かつ、自然に対して傲慢であったか気付かされてしまいます。確かに津波の被害は甚大です。でも、大気や水および土壌等の放射能の汚染はより深刻です。何時になれば、私達は普通の生活を取り戻すことができるのだろうか？
ネットワーク化された社会において、放射能のような問題は、決して一つの地域だけのことではない筈であります。

■ エネルギーの地産地消

大分県は「自然エネルギー供給量」「自然エネルギー自給量」が全国1位です。
再生可能エネルギー利用の‘環境先進県’です。
地熱発電所による地熱エネルギーを軸にバイオマス発電、マイクロ水力発電、温泉水利用の低温エネルギー発電など‘エネルギーの地産地消’をすすめています。

八丁原地熱発電所



■ 建築の果す役割

史上かつてない大災害を受け建築家は新たな発想の転換(パラダイムシフト)が求められています。
大分会としては、‘ひと・まち・匠’のつながり・きずなをより一層強固にすべく、地道で継続的な活動が必要になると思います。
大分にも古くから伝わるくらしの工夫がいまだ各地に少なからず残っています。自然の摂理を謙虚に受け入れ共にくらししてきた先人達の智慧を生かした建物。街づくりを再考する時がおとずれたと思っています。それを現代的解釈にどう置き抱えるかが私達、建築家の役割の一つと考えます。
さらに、自然エネルギーに恵まれた‘環境先進県’として、その恩恵を大いに活用しなければと考えます。
2011年‘ひと・まち・匠’のつながり・きずなで生き生きとした「新しい生活スタイル」の実現へ向け一歩を踏み出し、2050年にそれがどのような形あるものとして結実するのかを見つめ、そして地域の人々と一緒に歩みつづけなければなら
ないと考えます。